蘇芳集

いつからか

青山　丈

終戦と云ふ人と居る敗戦日
蛇口から二百十日の水が出る
八月の九月になつた白木槿
新聞を元に畳むで敬老日
鰯雲だらけになつたので帰る
いつからか十日の菊の辺を歩く
食卓に秋の彼岸の週刊誌

紫陽花

冨田正吉

持ち古りし顔も手足も梅雨に入る
父の日の午後はにはかに眠くなる
部屋ごとに闇のありけり太宰の忌
紫陽花が時間を溜めてゐるごとし
紫陽花を見て来し足を返すなり
老人のけふの御機嫌七変化
われもまた死なば良き父枇杷は黄に

花野

野路斉子

小鳥来る森の歴史の一頁
小鳥来て相変らずの大きな眼
何んの集ひか思ひ出せないまま花野
道を来る芋虫森に連れ戻す
孫と云ふ青年淑女草は実に
門叩くやうな風音火の恋し
偉い猫・偉い犬読む秋燈下

草の丈

前田　陶代子

起き抜けのこゑのくぐもる凌霄花
竹の葉の散るや音無き音重ね
竹幹の触れ合うて夏深むなり
人ごゑの濡れゐて四万六千日
夏負けや風にもまるる草の丈
笹濡らす雨のきれいや楸邨忌
つくろひの糸の匂へる夜の秋

祭

峰岸　よし子

抽んでし山の容の朝焼ける
万緑や魚の形に魚の骨
梅漬けてどこへも行かぬ日のつづく
向日葵やゴッホの耳のありどころ
風鈴の鉄より生るる風のこゑ
ひと雨に顕ちたる嶺々や祭くる
あかあかと川流れをり祭笛

庭椅子

宮尾　直美

蟻蠓や川のほとりの鬼子母神
病む猫に万緑の風通しやる
石鎚へ雨雲の過ぐ青蜥蜴
遥かなる風の通ひ路凌霄花
わが服も空も水色星涼し
庭椅子に風が置き去る蝉の殻
万策の尽きて病葉拾ひけり

夜の蝉

八木下　末黒

灯台の暮そめにけり月見草
雨につけ晴につけこの合歓の花
縁側の暮るるにまかす冷奴
寝転んで団扇をつかふ非番かな
稍あつて夕の蝉が夜の蝉
仏壇の障子を外す盆用意
呆気なく終る棚経意味不明

秋近し

吉田幸敏

田を渡る風のひといろ七月へ
気負ひなく今日の始まる百日紅
天帝にひがな仕へし蕃茄かな
子蟷螂いつぱしに鎌挙げて見す
をさなくて胸まで濡らし夜店の子
あさざ咲くただそれだけのことなれど
秋近し被曝電車が街に出て

熟睡

小川美知子

檜扇のいろの一途に雨降りぬ
昼顔をどこで見たのか忘れけり
其の人はアガパンサスの中を来る
四万六千日こつそりと熟睡す
駅員が右指し左指す大暑
誰も居らぬこの世へ戻る昼寝覚
リキュールのやうな小説夜の秋

昔日の

木内憲子

青蘆を深入るほどに水の息
遠花火より昔日のほろほろと
花蓼や昏き方へと径曲る
夏雲や人と離れて人思ひ
ゆく夏の存分な風衣にとほす
雀らに木下ありけり晩夏光
残暑ひりひり角立てる石の相

夏場所

小島みつ如

夏場所や「明星」の辞儀美しき
蛍袋まあ桃色によみがへり
梅雨前線盛り土流して人流し
夏樹剪る癌の庭師の眼光よ
文月のリハビリ不足文字曲り
心身の垢出す真夜のシャワー涼し
七夕や共に煌け父母の星